

おじさん

近頃の家庭で、見られなくなったもの。
着物箆笥。

学校の入学式に出る母親たちが、着物に羽織という恰好をしなくなったのだから、当たり前前かもしれないが。

私が幼いころ、我が家にも母親の着物箆笥はあった。

横に長いひきだしを開ける時、母はいったんきちんと座りなおし、力をこめて引っ張る。

着物は沢山入っていないのに、ひきだしが重いのににはわけがあった。

母と私だけの秘密だった。

母の着物を、父が勝手にさわることはない。

着物の下が、母の隠し場所だった。

お金や通帳ではない。

新品のネクタイ、きれいなハンカチ、エプロン、小物のバッグ。

そのころから流行りだした、密閉容器のセットもあった。

外国製のローソクや、クッションカバー。

どれもが、母が「英ちゃん」と呼んでいる人から買った。

た品物だった。

英ちゃんは、英二といって、母の弟だった。

父親は違うと聞いていた。

戦争で夫を亡くした祖母が、再婚した相手との子供だった。

「えいちゃんが生まれた時、私は本当にうれしくてね」と

母はよく口にした。

私は母から「栄子ちゃん」と言われていたから、最初、自分のことだとばかり思っていた。

英二おじさんのことかもしれないと気がついたのは、いつの頃だったろうか。

父親が、英二おじさんのことを好きではないと気付いた頃のように思う。

珍しく家で酔った父親が、「ろくな仕事もしないで」「あいつのような男は、女子供しか相手にできないのだ」と言っていたのを思い出す。

私ですら、誰のことを言っているのか分かった。

母親を見ると、何も言うなど私に目配せをしている。

「ごちそうさま」と私は席を立ち、台所に自分の食器を持って行った。

「栄子は俺より先に席を立つのか」

母親にからんでいる父親の音がする。

「すみません。あの子は明日試合があつて早いんです」

なだめる声がする。

私は父が嫌いではなかった。

母と私を大切に守ってくれる、強くて立派な人だった。

ただ、英二おじさんをうさん臭く思っていることだけは確かで、中学生の私ですら、その父親の嗅覚を「違う」と否定するわけにはいかなかった。

相性の悪い人がいることを、私は父親と英二おじさんで教えてもらったのかもしれない。

大切な母が、父の嫌いな英二おじさんを大好きでいることが、父には苦しかったに違いない。

そんなことまでは、あの頃の私にはわかりはしなかったが。

英二おじさんは、父のいない時に、ふらりと我が家にやってくる。

「英ちゃん、少しやせたんじゃない？」

母は心配して、すぐに台所に立つ。

あり合わせのものだが、中華丼やチャーハンなどを作つては英二おじさんに食べさせた。

私もおすそ分けしてもらったから、英二おじさん

が来るのは嬉しかった。

「姉さんにかかるよ、俺はいつまでも中学生なんだね」

おじさんはにこにこしながら、本当においしそうに食べる。

母は、その様子を眺めている。

母は英二おじさんと一緒の時は、なんだか気楽そうで、一人っ子の私には、姉と弟ってこんな感じなんだというらやましくもあった。

「姉さん、お土産がいつも売れ残りでごめんね」

このせりふで、おじさんの持っているポストンバッグから、いろんな品物がでてくる。

「そんなことないわよ。」

英ちゃんのおかげで、私はいつも気働きができるお嫁さんとほめられるんだから」

「お土産なんて言わないで、きちんと買ってあげるから、値段言いなさい」

ひとしきり押し問答があって、「申し訳ない」を連発した後、英二おじさんは母から紙幣を数枚もらう。

これもまた、おじさんが来たときのいつもの儀式だった。

父親が英二おじさんを信用していないのは、当然だった。

売れ残りの品物を母に押し付け、買わせているのだから。

ただ、その品物はセンスが良くて、素敵だった。母と英二おじさんは、久しぶりに会えておしゃべりできるのを素直によるこんでいる。

詐欺という言葉が、しっくりしないのも確かだった。

「おかあさんたら、また買っちゃったね。もう入らないんじゃない?」

「ひどいこと言わないの。英ちゃんはプレゼントといっているのに、私を買っているんだから。」

ほら、この間のエプロン、もうないのよ。

こうやって買いためておくと、急に差し上げるときに助かるものなのよ。

ネクタイだって、お父さん喜んで使っているんだから。

一度にたくさん買うと確かに高くみえるけど、一本あたりに割ってみるとそうでもないのよ」「

母と娘は、ひそひそと会話をかわす。

おじさんの、いわゆるプレゼントを、タンスの引き出しにしまうのは、私たちの密かな楽しみだった。

おじさんの品物は、母がきれいに包装して、「ちょっとしたものです」と手渡す時に役立っていた。

子供というのは、親戚に、父方も母方もない。

ただ、父方の親戚に母が気に入られていたのは、このような気配りもあったにちがいない。

そんな母を父はいとおしく思っていたのだから、私にとって英二おじさんはいい人だった。

ただ、子供は自分が中心になりたがる。

おじさんが来たとき、私を一番にしてくれたら、もっと嬉しかったに違いない。

でも、おじさんにとって一番は、母だった。

「姉さん」と呼びかけるおじさん。

なんとも言えない、優しい眼差しだった。

「姉さん」の子供だから、私をかわいがってくれたに違いない。

あれはたしか、幼稚園生の頃だった。

もう赤ちゃんではないのに、私はぐずって、母を困らせていた。

母にしがみつき、「だっこ、だっこ」とねだった。

「困った栄子ちゃんね」そう言いながらも、母は私を膝にのせてくれた。

おじさんが来たのはそんな時だった。

「大きくなったのに困った奴だなあ。

やっぱり、えいちゃんてのは駄目なんじゃないの、ねえさん？」

おじさんは私たちを眺めて、出されたお茶を飲んだ。

「栄子ちゃん、降りな。おかあさん、重くて大変だよ」

「いや」

そんなやりとりをしていたと思うと、急におじさんは近づいて、母を抱っこした。

「こりゃ重いや。栄子ちゃんは重い。」

「ちがう、おかあさんだよ」

「えいちゃんたら、やめてよ」

三人できやあきやあ騒いだのを覚えている。

なんだか楽しかった。

お母さんもおじさんも楽しそうだった。

ただ、私のどこかに、このことをお父さんに言っはいけないと感じていた。

もとはといえば、私が悪いのだから。

いつまでもお母さんに抱っこされていたのだから。

あの時、お母さんを抱っこしていたおじさんは、本当に嬉しそうだった。

私のほっぺたに、顔を押し付けていた英二おじさん。

少しだけ伸びたひげが痛かった。

おじさんは私が中学生の頃までは、我が家に遊び

に来ていた。

その後、私は全寮制の高校に進学し、そのまま家を出てしまったから、何も知らない。

自宅通学をしていたとしても、おじさんのことなど気にも留めなかっただろう。

社会人になって、おじさんのことを母に尋ねたことがある。

ちようど、母は着物箆笥を開けていた。

「おかあさん、まだ何か入っているの？」

なぜか、私の声は小さくなっていった。

「まあ、栄子ちゃん覚えているの？」

母は笑った。

「ここに隠していたの、ずいぶん前よねえ。」

母もひそひそ声になっていた。

母は、着物をそっと持ち上げた。

その下も着物だった。

着物箆笥に着物が入っている。

当たり前前のことに、私は驚いていた。

「あれ、全部使ったの？」

「待ってね、ひとつくらい入っていきそうなんだけど」

母は、下のひきだしを開けようとした。

「ほんと、何にもないわ。忘れてた。」

栄子ちゃんこそ、よく覚えていたわねえ」

母は、私の顔をしげしげと眺めてほほ笑んだ。

英二おじさんが、祖母の再婚相手の連れ子だったことを、私はその時に教えられたのだろうか？
記憶が曖昧だ。

ただ、母がその話をしてくれた時、口には出さなかつたが、私は母の言葉を思い出していた。

「えいちゃんが生まれた時、私は本当にうれしくてね」

母と英二おじさんが、全く血のつながらない兄弟であつたことを上手に隠す、その言葉。

嘘をついたわけではない。

ただ、おじさんが再婚相手の連れ子であることを、母は父に伝えなかつただけだ。

母にとって全くの他人である英二おじさんを、父が信用するはずがない。

もともと嫌いなものだから。

おじさんは六十前に死んだという。

「事故でね」としか、母は教えてくれなかつた。

ただ、おじさんには母がいた。

大好きな「姉さん」がいた。

おじさんは私のうちに来る時は、さぞかし楽しかつたに違いない。

私はそう思う。

母からもらった着物箆笥。

母の形見の着物を入れる場所。

仕事で切り刻んで使ってしまったから、もうわずかしかない。

ここに何を入れようか。

箆笥のひきだしを中腰であけながら、私はぼんやり思う。